

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第五部

第二十九章

message

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

29・message

279.

280.

281.

282.

283.

284.

285.

286.

287.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H & L 財団・財務部門勤務
〃 ひろ	健の妻
A. パウジーニ	健の秘書
サーディク	エドミールのステージネーム
X & Y	サーディクのボディーガード
竜門渕 優美子	メルノ
ヘルガ	H & L 財団・医療チームのメンバー

279.

折り畳み式のイスで折り畳み式の小さなテーブルの前に座り、祈りながら考え、考えながら祈る。

竜門渚の家とイリチャとの関係について。

祖母の代に神事の一切から退いた竜門渚家は、ユミコの世代にはもはや"無い"ものだった。彼女の姉妹は全員結婚して姓が代わっていて、ユミコも例外ではなかったのだが、離婚に至って、竜門渚姓に戻ったのだった。今となってはただひとり、その姓を名乗っている。

竜門渚が延々と引き継いできた神事は当主とその後継者しか詳しく知らされていない。ひじょうに個人的なことだったからだが、彼女たちは総じて強い力をもっており、それは子孫たち住民たちに伝播していき、協同体の中でも強い力を持つことになってしまった。

どういう訳か祖母はユミコをかわいがった。

竜門渚が延々と守って来たのは、始祖の封印された子である。

本来当主しか知らないそのことを、ユミコは祖母から聴いた。しかしそれはあまりに秘密めいていて、科学万能、物質にあふれた現代に生きるユミコには信じがたい話で、かわいがってくれる祖母にはわるいが、まるっきり聞き流していたのだった。

それが昔話や作り話などではなく、真実だったと知ったのは、キリガミネでスクナに会ってからである。スクナとの再会はユミコにじつに多くの情報をもたらしたのだった。

始祖の封印された子。オリカルクムの円盤に封じられたその子の名はイリチャ。イリチャとは母である始祖がつけた名ではない。はるかのちの世に他人がつけたものだ。

時至り、オリカルクムが崩壊し、封印が解けるまで、始祖の子孫は彼を見守り続けた。彼が人の子の魂体として生きることを認めた神々との約束でもあった。そして祖母めるのの代において、それは成就した。始祖の子孫・竜門渚の使命は終わったのである。

終わったはずだったのだ。

実の娘を失くし、娘の父親からは縁を切られ、ひとりになって竜門淵を名乗る自分が、たった今そのイリチャのために祈っている。

ユミコは己の魂がメッサナのメルノであり、始祖ミツハではないことを知っている。だがそれがなんだというのか。始祖の血が己の中で脈打つのをを感じる。イリチャは彼女の子でもある。神々の激しい怒りによって、生まれた直後に引き離された母と子。イリチャは母親のことなどおぼえてもいないだろう。むしろ恨んでいるかもしれない。

じっさい、イリチャのなかではこれが一番近かったのだが、彼は母親の存在を認めていなかった。

それでもかまわない、とユミコは思った。彼の苦痛は私の苦痛でもあると感じた。彼を世に送り出したミツハの痛みなのだ、と。

『そなたには魂の傷を癒す力がある』とスクナは言った。『そなた自身が深く激しく傷ついた魂である故に』

（そんな力が私にあるなら、出でよ。今この瞬間に……）

280.

テーブルに向かって両手の平の中に顔を埋めていたユミコがなにかつぶやいている。

荒海と時とがふたりを隔ててしまった

友よ

さまよう日々も失意の日々も
君を忘れたことはない

夕暮れのひなぎくを忘れたことはない

時は去り 時は来る

幸い君にあれ

《Auld Lang Syne》

なぜそんな歌をつぶやいているのか、サーディクにはわからなかったが、イリチャに向けたものだろうと想像はついた。

彼には麻酔が効かないという。痛みで眠ることもできないだろう。なのに、完全にちぎれた腕をくっつけるという難手術のただ中にいるイリチャへ。

やがてつぶやきは聞こえなくなった。眠ったのか激しい精神集中のすえに気を失ったのか。そつと肩に手をかけてみたが反応はない。時計は午前零時を回っている。眠気をもよおしたとしても無理はない。テーブルに向かったまま眠るのは辛かろうと、静かに抱き上げ、簡易ベッドへ運ぶ。一度だけ、(イリチャ……)とユミコはつぶやいた。

ふっとため息をつき、上着を羽織って外へ出たところで、パウジーニに出くわした。

281.

劇場はどうなっているだろう、とパウジーニに尋ねる。学生たちはまだ中にいるのだろうか。

パウジーニはうなずいた。「緊急事態は午前六時に解除される予定です。宿舎に移動できるのはそれからです」

様子を見に行きたいが、と伝えと、「保安部があちこちで警戒中ですから、心配はいらないでしょう。バランケもいっしょに行きたそうですね」

云われてみれば足元にまだら模様のネコが座って毛づくろいしている。「おや、もう一匹はどうした？」

「バラムは桧山家です。真くんといっしょに寝てますよ」

「なるほど、しかしバランケ、おまえ劇場は立入禁止だぞ、わかってるだろうな」

「にゃん」

＊

事件の概要をおおかた知らされていたYは、学生たちの消灯後も怪しい奴が入ってこないかどうか、目を光らせていた。マスターが戻ってくるとは思っていなかったようで、サーディクの姿を見ると心底ほっとした様子だった。

マスターの代わりに学生たちの面倒をみるなんていう役目も負ってしまい、かなり気疲れしていた。

「ご苦労だったな」とは思いがけない声掛けであった。ふだんのボディーガードの仕事など、やって当たり前のことだったから。

「いえいえいえ！」、ぶんぶんと頭を振ってYは応えた。マスターの仕事ぶりから学生たちをどう指導し、どう交流したらいいか、大体のことは心得ていましたからと、と。「ワーク中に劇場に閉じこめられるというアクシデントに学生も彼らの保護者も戸惑いつつ、むしろ、マスターの代理として残った私の言うことに真剣に耳を傾けてくれましたよ。たいへん、新鮮な経験でした。あの年代の子たちというのはかわいいものですね」

なんなら私の代わりに指導者として財団に残るという手もあるぞ、と水を向けると、まんざらでもなさそうである。

「いえいえいえ！ マスターあってこそ私の私ですから！ ところでお顔の色がすぐれないように見受けられるのですが、お疲れなのでは？」

カーペット敷きの床にじかに腰をおろし、ふう、とため息をつく。「ちょっとな。献血してきたから」

「え」とYの表情が固まった。

「け——、マスター、本国の医療管理局以外の場所での採血はならないという決まりを、よもやお忘れですか！！」

「でかい声だすな。忘れちゃいないさ。気がついたら注射針が腕に刺さってた。誰に？ H&Lの医療チームだ。食えんやつらだ」

「そんな——あなたが蚊に刺されるのさえ用心していた我々の苦労はいったい——そうだ、Xは
いったいなにしてたんですか！！」

「X？ 患者につききりだった。彼は最善の判断をしたのさ」

282.

長い、長い、長い夜だった。コンテナ内部は外光からいっさい遮断されていて、今は夜なのか朝
なのかわからない。

医師たちはもがき苦しむ患者をせめて眠らせようといろいろ試みたが、効果はなかった。
ちぎれた神経やら血管やら筋組織やら、骨やらを、麻酔なしで元通りに接合させようというのだから——
できるものならこんなところにいたくないと、桧山健は切実に思った。
イリチャ本人は「どっちでもいいよ」と素っ気なかったが、桧山は、いなければならない、と思っ
た。

あの時——マミヤを失い、むなしい抵抗の末に生きたまま心臓をえぐられるという、絶望と、痛み
さえ感じない虚無とを経験したオレには、それができる、と思った。

イリチャはなにも失ってはいない。彼は真のために生きなければならない。痛みは生への扉だ。

イリチャの無残な傷を正視することができる。

彼の絶叫を聴くことができる。

彼の右肩を力いっぱい押さえつけ、ただ勇気づけの言葉をつぶやくことができる。

そして彼はついに祈る。

桧山自身、叫ぶことも泣くこともできない痛みを通して。

今日が何月何日で、季節がいつなのか、まるで思い出せない。薄暗い空は早朝か宵か、それとも、この地方によくあるように、曇っているだけなのか。

しかしいくら湿度のある空気は新鮮で心地いい。吸い込み、体中にいきわたらせると、細胞のひとつひとつが満足の声を上げる。

柔らかな手が彼の上体を支え、目元に心労をにじませた顔が黙ってみあげている。

暴れる患者を長時間押さえつけて感覚のなくなった右手をけだるくあげ、努力して握り、ぐっと親指をたててみせる。

ほうっと深いため息、柔らかな手は上体をそっと抱きしめてくる。

「ありがと、健、ありがとう……！」

「オレは見てただけだ。ひろ。礼ならドクターたちに言ってくれ」

283.

ちょっとした手術ならできる設備だ、とヘルガは言ったが、それはかなり謙遜した表現だったにちがいない。そうでなければ、完全に切断した腕を体に接合するなどという手術が、十時間足らずで終わるわけがなかった。もっとも、それを可能にしたのは、『黄金門の(魔法の)血』とレル・ヴァリス医師の技術と、それから……

健が手術室を退出し、最初に採血した部屋へ戻って来た時、すでに誰もいなかった。明け方近い微妙な時間帯だったから、誰もいないのは不思議ではなかったが、さて、サーディクと西ノ宮さんはどうしただろうとぼんやり部屋を見渡していると、そこから秘書のパウジーニがやって来た。手術が成功裏に終わったことを健の方から報告し、パウジーニは手放しで喜んだ。そして、「ユミコさんからこれを、ボスに渡してほしいと頼まれました」、と言う。

「書類鞆を？」

「中の物をボスに一任するとおっしゃるのです。迷惑だろうが、処分をお任せすると」

ユミコ本人は館内の宿泊施設に移ってもらった、とパウジーニ。

う～ん……と思わずうなってしまう。とにかく、いちどうちへ帰って、シャワーを浴びて、着替えて……昨夜一睡もしてない頭は眠りたがっている。今書類の類を見る気にはなれない。でも、あとで彼女と顔を合わせた時に「見てません」じゃ格好がつかないからなあ。しぶしぶ鞆を開けて中の物を手にとって……眠気が飛んだ。西ノ宮奈々子の遺品ではないか！

＊

術後のイリチャの様子を見にいったひろと入れ違いに、うちへ帰って、真がネコといっしょに丸くなって寝ているのを確かめた。ベネトナシュは……やつの言うことを信じるなら……イリチャが元通りになるまでは手を出してこないはず。それに、バラムがいれば心強い。

イリチヤは死んだように眠っていた。鼻孔から酸素を吸入し、傷ついた眼球保護のために顔の半分は包帯、右腕は栄養補給の点滴チューブと、まるで重病人である。ひろがそう言うと、ヘルガは笑った。「立派な重傷患者よ」

「瓦礫の中に倒れている彼を見た時、もうダメだと思ったわ……」

「無理もないわ」ヘルガもケガ人を最初に発見したひとりである。「でも、心臓が動いてさえいれば、レルがなんとかしてくれる」

「信用してるのね」

「もちろんですとも」

呼吸に合わせて上下するイリチヤの胸を見つめて、ふたりは沈黙する。

「……じつは、ね」、とひろ。

「うん？」

「真が、あたしを呼んでた。『ママ、ママ』、『助けて』って」

「そうだったわね」

「あのとき……なんか……違和感があったの」

「……違和感？」

「真は、パパのことが大好きな子なの。赤ちゃんのころからそうだった。どんなにむずかってもパパが抱き上げるとぴたっとおさまるの。さいしょは、なんでなのよ、って、ちょっとむかついたけど、でも、ふたりはとても仲良しなんだってわかってくと、べつにむかつくことないじゃない？ なんていうかな、彼らは相思相愛だったのね、息子が呼べばパパがこたえる、パパが呼べば息子がこたえる。だから、そういう父子を見てるのは、むしろ、楽しかった」

「……」

「だから……あの場面で……真はママを呼んだりしない、って、思っちゃったのよ」

「マミヤ——」

ひろは、ちょっと笑った。

「頭のどこかでそういうふうに、観察してた。呼ぶならパパだわ、違和感で、そういうことなの。それで、あたし、ああ、って思った。直感。ママを呼んだのは真じゃない。イリチヤだったんだじゃないかな、って」

「……」

「それも、自分を生んだ、本当のおかあさん」

「マミヤ——」

「ヘルガさまがここにいてくれてほんとによかった。ほかの誰にもこんな話できないもの。あたし、嫉妬してるんだと思う。父と子の関係に。イリチャの本当のおかあさんに」

「マミヤ——」ヘルガはサージカルガウンの上からひろを抱きしめた。マミヤの直感は当たっているという気がした。

「黄金門の血が相手を選ばずに生命力を与えるように、あなたの存在はみんなを繋いでいる。みんなに生命力を与えている。それが金星の魂なの。いい？ それが本当のことよ」

シャワーを浴びてコーヒを淹れ、封筒のテープを剥がしにかかっていると、ひろが戻ってきた。

「もういいのか？」

「うん。眠れるときに寝かしてやってくれって。お医者さまたちもみなさんお疲れだしね」、と健の作業中の手元に目を止める。「なあに、それ」

健はちょっと考えてから、ひろには全部話しておこうと思った。こと、奈々子に関しては、全部。そこでかくかくしかじかと打ち明けた。

それは西ノ宮奈々子が高校一年生の秋以降、亡くなるまでの三、四ヶ月の間に書いた原稿だ、ということしか、わかっていない。

同じ文芸部に在籍していた弟によると、部室に置いてあったのを部長が西ノ宮家へ届けたのだという。部長自身が封筒に丈夫なテープを貼った。誰も中をみていないはずだ、と。

一旦は奈々子と一緒に棺に入れられたが、奈々子の曾祖母が「これは燃やしてはいけない」と言って取り出したのだという。

「あの年の夏……オレが渡豪した年のことだけど、西ノ宮のお母さんがこれを受け取ってくれ、と言ってきたんだ」

「あの年、ね。でも、どうしてあなたに？」

「奈々子のひいおばあさんという人は、奈々子に縁のある人に渡すようにって、言い残したんだそうだ。お母さんは、オレしか思い浮かばないんだというんだな」

「ふうん……」

「実は弟の正弘が、奈々子の読書感想文を読んで文芸部に勧誘したんだ。オレはそっち方面はさっぱりだったし」

「理系だもんね」

「うん。でも正弘は幽霊部員で、勧誘もカゲに隠れてやってたし、奈々子と接点はなかったはずなんだ。いろいろ腑に落ちないんだが、それでも、正弘の間違いだろ、って思った。オレじゃない。遺品を受け取る理由がないから、その場で断ったんだ」

「それが、今になって？」

「そう。西ノ宮のお母さん、ここへ来てるんだ」

「え」どうして？ こんな時に？ ななこのお母さんが？

健はひろの言外の疑問に首を振る。わからない。でも、とにかく、これを開けてみよう。奈々子は何を書き残したのか。知らねばならない運命らしいから。

＊

縦書きの四百字詰原稿用紙。きれいに揃えられて、左上をターンクリップでまとめてある。十数年の歳月がクリップの跡をくっきりと遺している。

一枚目に目を通し、ひろに渡す。二枚目、三枚目……健はおもむろに立ちあがって、言った。「オフィスへ行って、コピーをとってくる」

286.

劇場の床で毛布をかぶってうとうとしていたサーディクは携帯の着信で起こされた。午前五時、学生たちはまだ眠っている。

誰だ、こんな時間に。文句をつぶやきながらみれば。相手は健だった。

「もしもし～」

《起きろ！！ 寝てる場合じゃない！！ 今すぐうちへ来てくれ！！》

＊

ユミコは今日の便で日本へ帰る予定だった。イリチヤに関して、もう自分にできることはない。市内にとってあったホテルに置きっぱなしの荷物をとりに行かなければならないし、早めに出立しようと支度していると、桧山健の秘書が部屋をノックした。早朝から申し訳ないが、健の自宅まで同行願いたいというのだった。ホテルのチェックアウトと飛行機の予約を理由に辞退したかったが、秘書は引き下がらなかった。「ヒヤマは、ご帰国の延期を希望しています！」

気が重い。娘の遺品を無理やり押し付けてしまったことで、彼の機嫌を損ねたかもしれない。自分は結局部外者なのだから、とっとと逃げ出せばよかった。（それにしたって、帰国を延期？　どうということ??）

秘書が桧山家のドアを開け、入室を促す。おそろおそろの態で行くと……桧山健、その奥にはサーディクがいるではないか。ふたりとも真剣な表情。ユミコの胸中はますます（???）である。そしてもうひとり。

「こんな時間にお呼びたして申し訳ありません。ななこさんのおかあさま。私、健の妻です」

めりはりのある体型にきびきびした印象のある若い女性は桧山夫人だった。たぶん、初対面だが――「あの、奈々子を、ご存知？」

桧山夫人はにっこりとうなずいた。裏表のない、率直なひとにみえる。

ユミコは桧山健に娘の遺品を託すことにいくつもの葛藤を抱いていた。そのひとつがこれだった。桧山は妻子ある男性で、娘は彼にとって異性、彼の家庭になにごとか波乱を起こすのではなにかという懸念である。

「おかけになってください」と桧山夫人はユミコの手をとってソファへいざなった。

「私はななこさんのことをよく知っています。よく知る、機会があつたんです。ですから、ななこさんのあの原稿が、健の手で紐解かれることがどれほど奇跡的なことか……信じられないくらいです」

「ひろの言う通りです」テーブルにコーヒーを置いてくれたのは健だった。「ありがとう。西ノ宮さん」

しかしユミコはかえって困惑する。彼らはなにをいっているのだろう。
「あの、桧山さん」、ユミコは切実に言った。「あたくし、ご迷惑を承知で持ってきたんです。どうか
ご無礼をお許してください」

健は目を瞠っていった。「とんでもない！ 一度は受け取りを拒んだのは僕のほうです。あの時
僕が受け取っていれば、あなたに面倒をかけずに済んだのですが。でも、当時の僕には、この原
稿を理解するのは、難しかったでしょう」

287.

「あの一。ちょっといいかね」サーディクにしてはめずらしく下出に出てきた。「ケンはどうしてこの
ひとを『ニシノミヤさん』と呼ぶんだ？」

「え、どうしてって……」

「あ、あの、桧山さん、あたくし、今は西ノ宮ではなくて竜門淵というんです。西ノ宮とは離婚しまし
たもので……」

「え、そうだったんですか」

「ええ、奈々子の三回忌の後に。ですからあの西ノ宮の家ももう人手に渡ってるんです」

ふと、ひろはなにげにサーディクが不機嫌なことに気がついた。健が叩き起こすようにして呼び
つけたのはたしかだが、彼はそうそう、自分の機嫌の良し悪しを表に出すタイプではない。

（え——もしかして——）

健もなにか感づいたらしい。このへんの呼吸はさすがに夫婦である。

健は無理やり話題を変えた。

「原稿はコピーさせてもらいました。原本にいろいろ書き込みたくなかったので。

物語の舞台はほぼ現代のパリ。主人公はパリの音楽学校に留学中の十九歳の少女。しかした
だの少女ではない。ヨーロッパの小さな国の王家の人間です。彼女は外国人旅行者と恋に落ち
ます。旅行者は日本人」

ユミコは桧山健の説明に耳を傾けながら思った。なんとなく、映画『ローマの休日』が思い浮かぶ。これを書いた時、奈々子は十五で、多感な年ごろだった。現実離れした、おとぎ話を紡ぐような感覚だったのかも……

ユミコは桧山健の説明に耳を傾けながら思った。なんとなく、映画『ローマの休日』が思い浮かぶ。これを書いた時、奈々子は十五で、書き慣れてもいなかったはず。現実離れした、おとぎ話を紡ぐような感覚だったのかも……

「もし、十年前にこの原稿を読んだとして、僕は……現実離れした、おとぎ話のような話だと思ったに違いありません」
「そう……ですわね」とユミコも同意する。

「少女はまだ十九歳でしたが、いくつも縁談があった。王家の人間だったので、それなりの家柄の者と結婚しなければならなかったからですが、彼女はたいへんな重荷に感じていた。モラトリウムの意味もあってパリに留学したのです。」

彼女はくんにローティーンの甥がいました。彼女の兄、つまり国王の子です。ハガキにパリの風景をスケッチし、近況を甥に書き送った。甥の絵画と音楽への関心は叔母の影響だった」

「……………」

「少女の名はソフィア。パリで恋に落ちる旅行者はコウイチ。甥を、ソフィアはエディと呼んでいた」

「それは事実だ」口を挟んだのは……

ユミコは、とつぜん口を挟んできたサーディクを見た。それは事実……？

「私は絵画と音楽を叔母から学んだ。叔母は私をエディと呼び、パリから自筆の絵ハガキを送ってくれた。全部とってある。なんならお見せしよう。彼女はソフィアという名で、私の父の妹。私がローティーンのころパリへ留学し、やがて、音信は途絶えた……」

「そうなんです、西ノ宮さん。ソフィアもエディも実在するんです。サーディクの本名はエドミール。
そしてソフィアは僕の母、コウイチは僕の父です」

29・「message」

30・「」へ続く

あとかき

細かいことですが、ターンクリップみたいな物はたぶん棺に入れられませんね。はずしてくださいってことになると思います。

2025年9月16日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十九章 message

2025年 9月20日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[イラストAC](#)

[NEO HIMEISM](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社